

# 結果は どう作用するのか

政界展望



敗因は都政の課題ではなく明らかに菅政権への批判だ

ジャーナリスト

鈴木哲夫

# 勝者なき都議選の 総選挙に



都議選は敗北？

自民党内に「総選挙への危機感」

「勝者なき選挙だった」

7月4日に投票された首都決戦、東京都議会議員選挙。自民党東京都連幹部は結果を見てこう評した。

「今回の都議選は、うち（自民党）は33議席で第1党に返り咲いたが、どの政党も会派も結局は中途半端な議席数で単独過半数には及ばず、議会ではいろいろな党と妥協しながら組み合わせ、過半数を取りに行かなければならない。作業は大変だ。そう簡単に行かない」

だが、都議選の結果は本当に「勝者なき」だろうか。いや違う。取材を通じて分析して行くと、勝ち負けがくつきりと浮かび上がってくるのである。

ズバリ、自民党は「敗北」だ。

選挙結果は、自民党は33議席を獲得し、これまで第1会派だった小池百合子知事与党の都民ファーストの会（以下都ファ）にリベンジを果たし第1党に返り咲きはした。

事前に出回った自民党のものと称する世論調査では、自民党は50議席を超える勢いとされたが、これは一部改ざんされたものが情報戦の末に出回っていたものだ。

私の取材では「50は行かない」（都連幹部）との予測だったが、それでも「40議席台は確実」（同）と見られ、今回選挙協力した公明党と合わせると都議会の主導権を握る過半数の64はゆうに超える」と見られていた。

ところが、勝利の流れに対して小池知事が急遽投票前日に都ファ候補者の激戦区への応援に入り、議席を上積みした。

ただ、自民党の敗因はその小池劇場によるものだろうか。

いやもっと別のところにある。しかも、都議選にとどまらず国政における自民党政権にも直結する極めて深刻なものだ。

「今回の選挙結果は自民党の都議団が負けたのではない。菅義偉政権が負けたんだ」

そう振り返ったのは落選した自民党元職の都議だ。

「選挙運動をやっている、終始新型コロナと五輪という中央の2大

テーマが降りかかってきました。支援者からでさえ何をやってるんだと。特に飲食店などは限界に来ていて菅政権批判がもろに都議レベルに来ました。五輪についても、うちは今回立场上反対するわけにも行かず公約では触れなかったが、有権者からは中止、延期、無観客など迫る声は非情に強かった」（同元職都議）

菅政権の新型コロナウイルス対策の手詰まり感是否めなかった。緊急事態宣言もいままや都民に響かない。

菅首相がかけているワクチン。菅氏の大号令で本当なら接種は順調に進み都議選では自民党の強みとなるはずだったがこれの誤算が生じた。供給量そのものや自治体への配布の調整でパイプが詰まってしまった。

東京23区の担当者からは、「国の言う通りに接種体制を強化したのにワクチンが届かない。このままでは60歳以下の接種はほとんど後ろ倒しになる」（豊島区役所幹部）など怒りの声が次々に上がった。

さらには大企業などの職域接種に





コロナと五輪という中央の2大テーマが降りかかってきた



この逆風は都議選だけでは済まない

想定を超える申請が殺到したため政府はこちらも受け付けを停止。菅首相のワクチンアピールは都議選では逆に「遅れている」と有権者に映ったのだった。

さらには菅政権の五輪対応も迷走ぶりが目立った。国民の安全への不安を払しょくできず、有観客か否かの判断も右往左往した。

元々都議選は地方選挙でありながらも東京の有権者は無党派が多く、投票行動には地域の問題よりも国政が大きく左右する傾向がある。今回も例外ではなかった。

敗因について自民党本部の幹部は

言う。

「敗因は都政の課題ではなかった。有権者は新型コロナとワクチン、五輪に強烈な不満と不安と関心があつた。明らかに菅政権への批判だ」

都議選にとどまらず、政権批判はマスコミの世論調査でも浮き彫りになっている。

都議選直後に実施した調査で、時事通信社は菅内閣の支持率は前月から3・8ポイント減の29・3%、不支持率は5・6ポイント増





「まさに奇跡的とも思える結果だ」山口那津男公明党代表

の49・8%。政権発足後、支持率が3割を切り「危険水域」とされる20%台に落ち込むのは初めて。朝日新聞も支持率は昨年9月の発足以降最低の31%、不支持率は49%。毎日新聞は支持率30%でやはり最低、不支持率は62%にもなった。そしてどの調査も、菅政権の新型コロナ対策を半数以上が十分でない」と批判している。

こうしたことから、危機感が党内

のあちらこちらから聞こえ始めた。「この逆風は都議選だけでは済まない。任期満了の総選挙がここ3カ月の間に必ずあるがそこへつながらず。このまま支持率が回復しなければ総選挙は相当厳しい」（前出自民党本部幹部）

「今年4月に行われた3つの国政選挙で自民党は全敗した。そして楽勝のはずの今回の都議選ですらこのザマ。総選挙は厳しい。特に3回生

以下の地盤が固まっている議員の危機感には相当」（自民党ベテラン議員）

「東京五輪が閉会する8月8日から一気に政局だ。菅さんで勝てるのか、総裁選では菅おろしの動きも出てくるかもしれない」（自民党3回生議員）

### 全員当選の公明党、決して勝利とは言えない

じつはこの「菅おろし」の動きを後押しする気配を見せ始めたのが公明党だ。

公明党は今回の都議選で、候補者全員23人を当選させた。それだけを見れば勝利とも取れるが内実はまったく違うのだ。

山口那津男代表は、全員当選直後の夜の記者会見でこう言った。

「まさに奇跡的とも思える結果だ」だが、記者団の前で思わずそう

語った表情は達成感より疲れ切ったあとの放心状態のような安堵感だった。つまり、「奇跡」というのは困難を克服した前向きなものというよりは、「間違いなく議席を減らしそ

うな中で様々な要因が重なって何とか奇跡的に踏みとどまった」というのが真意なのだ。

投票前夜、公明党幹部は「今回初めて全員当選できないかもしれない。21は行くが2落とす可能性が高い」と私に話した。

最大の支持団体、創価学会の東京の幹部も前夜に「過去の都議選でもっともきつい」と話した。

公明党は、東京に最大の支援団体の創価学会本部があり、政治活動の発祥は1955年の都議会議員誕生である。その東京の都議選全勝は使命だ。

ただ今回は大苦戦だった。

いちばん大きな要因は公明党の十八番の選挙戦が新型コロナによって封じられたからだ。通常なら学会員が徹底して選挙区をその足で回って支持を確実に広げる。ところが新型コロナでそれがまったくできなかった。

しかも、中央では自民党と連立政権を組んでいることから、限られた







原田稔創価学会会長は、都議選が終わってすぐに北海道や大阪、兵庫などを訪問した

党との距離感でいいのかわか  
りませんでした」

選挙区を精力的に回ってきた山口代表も現場の運動員と同じ体感だった。

そして、投票日の4日前になって、急に「五輪を無観客で」と言い出した。

た。当初政府方針に歩調を合わせて公明党は五輪については公約化しないとしていた。にもかかわらず急な方針転換…。

「すべての選挙区を連日回って政権への厳しい批判にさらされ、追い込まれて独断で方針転換した」(公明党衆議院議員)

私に最後まで厳しいと語っていた2議席は何とかギリギリ当選に滑り込んだが、最終的に当落を争った相手は、劣勢とされていた都ファではなく、今回連携し選挙協力もした盟友の自民党候補だった。最後は自民党が票を伸ばせず自滅し相対的に公明党が滑り込んだのだ。公明党のベテラン議員は総選挙に向けての自公体制に危機感を持つ。

「今回良かれと思った自公の選挙協力が結果的には果たしてどうだったのか。もっと連立内野党の立場を鮮明にしなければ総選挙は厳しい」

元々公明党は次の総選挙を「党の存亡をかけた天王山」(公明党幹部)に位置付けている。長期低落傾向で比例票はいまや最低ラインとしてきた700万票をも割るところまできた。次期総選挙では小選挙区のうち北海道、東京、広島では世代交代や新人擁立もあつて、必勝態勢で動いている。

何としても勝たなければならぬ。しかし、都議選での逆風は相当なもの。

そこで、何と公明党は「菅おろし」も示唆し始めた。

都議選直後に山口代表がBS日テレの番組で、「ワクチン接種が進むことなどを考えれば総選挙は遅い方が望ましい。(都議選は)選挙運動自体が制約され、非常にみんな苦勞した。いまの状況が続くとすれば、(総裁選が先、総選挙はそのあとが)望ましいかもしれない」と発言した。

つまり総裁選が先ということ、自民党内でその後の総選挙を考えて



支持率の低い菅首相では戦えないと、「菅おろし」が起きる可能性があるのだ。山口代表が総選挙をあとにと発言したことは、その「菅おろし」を容認することになる。いや、「あえて火をつけたとも言える」(公明党幹部)のだ。

また、一般には報じられていないが、学会の原田稔会長は、都議選が終わってすぐに7月11日から北海道や大阪、兵庫などを訪問した。学会関係者は「明らかに総選挙への危機感。組織をもう1度引き締める目的があつた」と話す。

公明党は総選挙に向けた公約をこれから本格的に詰める作業に入りますが、前出ベテランはこう話す。

「自民党と足並みを揃えるどころか、逆に自民党とは違う庶民目線の新型コロナ対策や経済対策を打ち出す可能性もある」

菅首相は、官房長官時代から連携してきた学会幹部がいま要職から外れ直接のパイプを失っている。総選

選挙運動の場面でさえ面と向かって中央の批判がもたらした。飲食店などを回ってビールを配った学会員によると、店主などから罵声を浴びせられたという。「公明党は新型コロナ対策でいっただい何をやってるんだ。飲食店いじめは止めろ」

自民党と同じく、明らかに都政についてではなく国政の菅政権・連立政権の批判が向けられた。併せて「東京五輪もやるつもりか」とさんざん言われたという。新型コロナと五輪。同学員は言う。

「公明党は連立政権では自民党にいろいろ注文を付けてきていますと主張して回ったんですが、政権の批判がもたらしたのが今回の都議選でした。私たち現場は、このまま自民



手塚仁雄立憲民主党東京都連幹事長



小池晃日本共産党書記局長

挙へ向けてこのまま世論の政権批判が収まらなければ、公明党容認の「菅おろし」が現実味を帯びてくる。では、都議選の「勝者」はいるのか。

それは、共産党と立憲民主党かもしれない。野党共闘が課題とされながらも、イデオロギーや政策面でなかなか折り合えない両党が今回はなん

と選挙協力を進めた。

「共産は小池晃書記局長、立憲は手塚仁雄党東京都連幹事長。勝つためには野党が1つになるしかない」という現実主義の2人が水面下でかなり前から協力を進めた。立憲が2人出している選挙区を1人にして共産候補の票を食わないようにしたりその逆も」

結果は、共産が19で1増、立憲は倍増の15。そしてじつは都議会で両党合わせれば第1党になる。

投開票当夜に、共産党や立憲の幹部らに話を聞いたが、いずれも興奮冷めやらぬ様子。「今回の選挙協力は次(＝総選挙)に必ずつながる」(共産党執行部)、「やってみて結果が出た。出口調査で共産党支持者の7割以上が立憲と書いてくれた。選挙協力とはこういうものなんだと組合関係者などが実感した」(立憲東京選出衆議院議員) などなど。

立憲本部選対幹部は言う。

「何より総選挙に向け今回の選挙協力の成功体験は大きい。うちと共産は都議選では勝利したと受け止める」

さて当の菅首相。

もちろんこのまま引き下がることなど考えていないだろう。

再選するためには、とにかく総裁選より前に自分の手で解散総選挙を打ち、圧勝でなくとも自公で過半数と9月5日にパリンピックが終わって総裁任期の9月中に解散。総選挙は10月3日か10日、17日あたりの投開票というタイミングが菅首相の限られた有力なシナリオだろう。

菅首相に近い無派閥議員は言う。

「菅首相が総選挙で掲げるのはワクチン接種と、もう1つは新型コロナ対策と銘打った史上最高額の経済対策の補正という二枚看板。これ以外に五輪の盛り上がりも計算に入っていたがもはや政権浮揚になるかどうかは読めなくなつた。二枚看板で総選挙では自公で過半数というギリギリ勝利のラインを目指す。そうすれば党内で退陣は言えなくなる」

ただ、都議選の結果や各種世論調査で示されている国民の批判。秋の大政局は避けられそうにない。

(了)

